

## 論文

# 日本語教科書における論文・レポートの文体の指導項目 —中上級日本語教科書の比較から—

永岡 悦子

## 1. はじめに

本稿では、大学で学ぶ留学生のための論文・レポートの作成を目的に作成された、中上級日本語教科書を対象に、その文体の指導項目について比較・考察する。

現在、多くの大学や日本語教育機関で、留学生に対する論文・レポートの書き方の指導が行われている。論文・レポートは「報告」の文章として、ある明確な目的のもとに、種々の資料を活用しながら、特定のことがらを客観的かつ論理的に読み手に伝える文章で、一般的に「である体」が用いられる<sup>1)</sup>。この「である体<sup>2)</sup>」は、日本語教育では中級で指導される項目である。

日本語学習者は、初級の段階から「です・ます体」「だ体」の文体の使い分けを学習しているが、初級における文体の指導では、親しい友人同士の会話や、上司から部下に対する言葉など、話し言葉の待遇表現として、または日記における自己内対話の表現手段の一つとして導入されていることが多い<sup>3)</sup>。これに対して、中級以降で学ぶ「である体」を中心とする論文・レポートの文体の学習では、書き言葉としての文体を本格的に学ぶことになる。ここでは、初級の場合と異なり、著者名など話題の人物や読み手に対して敬称や敬語を用いず、「脱待遇」表現で書くことが基本となる。また「したがって」などの接続表現や、「～と考えられる」といった定型表現等、論文・レポートのための特徴的な語彙・表現の指導など、「である体」にふさわしい語彙や文型の選択が必要となるため、「である体」の導入に伴い指導項目が大幅に増加する。日本語学習者にとっては、初級の「話し言葉」の世界から、「書き言葉」の世界への「モードチェンジ」が求められる。しかし、中級以降になっても、以下の作文に見られるように、文章中に

1) 村岡 (2005: 360) を参考。

2) 文末の単調さを避けるため、「だ体」と混用する例も多い。小宮 (2005: 358) を参考。

3) 『みんなの日本語初級 I II』『げんき I・II』『語学留学生のための日本語 I・II』ほか。

「です・ます体」「だ体」「である体」が混在し、文末文体を統一できないほか、「話しことば」と「書き言葉」が入り混じり、文体的に調和のとれた文章を書くことができない学習者が少なくない。

【学習者の作文例】 ※問題点を下線で示す。( ) は、その修正案を示す。

例1：ガラパゴス化現象から脱却するためには、今まで海外に対してあまりにもかたく閉ざしてきた門戸を世界に対して開き、また自らも世界に積極的に出て行くことが必要だ。また競争に打ち勝つという考えではなく、世界と「共生」していくという思想も重要でしょう (→重要であろう)。世界の変化・多様化を日本の発展に結び付けるような振る舞いが求められている。(中国・大学4年)

例2：物造り大国の日本には今物造りはますますガラパゴス化に進んでいることである (→進んでいる。) (中国・大学3年)

例3：日本の電気製品は世界中にも高い評価があるのに (→にもかかわらず)、世界市場占有率はまだまだ (→いまだに) 低いである (→低い)。(中国・大学3年)

例4：この時代はコンピューター情報と文化交流の世紀になる。京劇も例外じゃない (→ではない) だろう。(中国・大学4年)

例5：例えば、中国での調査問題は、日本人と中国人両方の研究者が共同作業で、質問の分類がもっと (→さらに) 完璧に (→精密に) できるだろう。(中国・大学4年)

文体の混用は、意思の疎通の面では大きな障害にはならないため、学習者も指導する教員側も後回しにしがちな問題であるが、書き言葉中心となる上級の日本語学習を効果的に行うためにも、中級の段階で書き言葉の文体の概念と語彙・表現を確実に身につけておく必要がある。本稿では、大学で学ぶ中上級日本語学習者を対象とした日本語教科書7冊を対象に、論文・レポートの文体の指導項目を調査・比較し、文体の指導方法について考察する。

## 2. 先行研究

留学生の論文・レポートに現れる文体上の問題の背景には、主に習得上の問題と、教師の指導上の問題とが関係している。

学習者の習得上の問題点を指摘したものに村岡(1996)がある。村岡は、自然な日本語の文体は、適切な状況判断によって表現内容に即した語彙が文法的に正しく配置され

た文に存在するが、日本語学習者の場合は、学習者の文化的背景の相違、表現内容の不足、既有的語彙・文法の不足のため、自分の作成した日本語文の文体が自然であるかどうかモニタリングできず、適切な状況判断や語彙・表現の選択が困難であることを指摘している。また村岡は、学習者用の日本語辞典や国語辞典に話し言葉・書き言葉の見出しが必ずしもついておらず、学習者が自分で直ちに文体の適切性を確認できないことも、学習を難しくしている要因の一つであると述べている。

教師の指導上の問題では、日本語の話し言葉と書き言葉の基準が明確でないため、使い分けの体系的な指導が行いにくいことがあげられる。川越（1991：68）は、「話しことば」と「書きことば」を区別する明確な基準があるわけではない。例えば、日本語教育では特に中級以上になると語句によっては「これは書きことば的です」と注をつけて教えることがあるが、教師のこのような判断は多分に主観的なものである。」と述べ、教師側の問題を指摘している。長谷川（1992）も、初級の段階においても、文法や表現意図などの学習項目を、「話し言葉」として教えるのか「書き言葉」として教えるのかがあいまいになっており、それが文体の学習を遅らせていると指摘している。

本稿では、論文・レポートの文体について、教師の指導上の問題を考える立場から、その指導の拠り所となる日本語教科書の比較・考察を行っていく。教師が指導を行う際に参考とするものの一つが教科書である。1999年に専門日本語教育学会、また2004年に日本語教育学会にアカデミック・ジャパニーズ研究会が置かれるなど、1990年代から留学生のための論文作成・口頭発表等のアカデミック・ジャパニーズの研究・教育が盛んになってきた。また大学で学ぶ留学生を対象とした、論文・レポート作成を学ぶ教科書も多く出版されるようになった。これらは「大学で学ぶための教科書」という同じ目的を掲げながらも、教科書によって指導項目に差が見られる。しかしその共通点や相違点などの検討はあまり行われていない。そこで、本稿では各教科書が取り扱っている表現の種類を比較を通じて現在の指導項目の傾向について明らかにし、今後の文体指導における教科書の役割と問題点について考察を行う。

### 3. 調査方法

#### 3-1 調査対象

大学で学ぶ留学生に対する論文・レポートの文体の指導方法を考察するため、中級以上の日本語学習者を対象とした、代表的な日本語教科書7冊における文体の指導項目を比較・分析する。これらの教科書に共通しているのは、各教科書に論文・レポートの文体の特徴を学ぶ章が設けられている点である。それぞれの教科書で文体が扱われている章の中から、論文・レポートの文体として提示されている指導項目（表現・文型）を抽出し、指導項目の種類を比較する。調査の対象とした教科書は、下記の通りである。

## 【日本語教育用教科書】

〈日本語ラ〉：『大学で学ぶための日本語ライティング』2006年

〈作文編〉：『大学・大学院 留学生の日本語 ②作文編』2001年

〈小論文への12〉：『小論文への12のステップ』2008年

〈理工系作文〉：『研究報告を書く I 理工系専門日本語 作文技法コース（改訂版）』2007年

〈論理的な文章〉：『留学生のための論理的な文章の書き方』2000年

〈ワークブック〉：『大学生・留学生のための論文ワークブック』1997年

〈論文作成編〉：『大学・大学院 留学生の日本語 ③論文作成編』2002年

### 3-2 分析方法

論文・レポートなど、大学でのアカデミックな目的のために使用され、文体を形成する語彙は、「専門日本語」と呼ばれている。「専門日本語」は、ある専門分野に特有の専門用語等を対象とする「内容語」と、接続詞表現、助詞相当句、文末辞など、専門分野における文法的な特徴や位相・文体的特徴を支える「機能語」の二つに大きく分けることができる<sup>4)</sup>。本稿では、後者の「機能語」に注目する。仁科（1997：63）は「機能語によって思想の表現が可能になる」とし、日本語学習者が専門用語の習得と共に機能語を学習することの重要性を指摘している。本稿においても、論文・レポート教育用教科書における文体に関わる「機能語」について分析を行う。

収集の対象とした表現は、前述の教科書の「文体」が扱われている章において、指導項目となっていた文末文体（名詞文・形容詞文・動詞文の文末文体）、接続表現（接続詞、接続助詞）、副詞、縮約形である。それぞれの分析方法は、下記の通りである。

文末文体：だ体・である体の肯定形・否定形、現在形・過去形について、名詞文、形容詞文、動詞文ごとに分類する。

接続表現：接続詞、接続助詞、及び連用中止形について、表現形式ごとに分類する。

副詞：副詞について、機能ごとに分類する。

縮約形：文末で使用される縮約形が、論文・レポートの文体ではどのような表現として指導されているかについて、表現形式ごとに分類する。

## 4. 結果

### 4-1 文末文体

論文・レポートの文体は「だ体」「である体」で書かれるが、その文末形式は品詞ごとに異なる。ここでは名詞文、形容詞文、動詞文の順に各教科書における文末文体の指

4) 村岡（2008：62-63）を参考。

導項目を比較する。

名詞文の文末文体の種類は、「だ体」「である体」それぞれの肯定形・否定形、現在形・過去形をあわせると6種類ある。「名詞+である」はすべての日本語教科書で採用されている基本形である。7冊中4冊の教科書では6種類全て文体の形式を提示していたが、残りの3冊は「だ体」「である体」の現在形のみを提示するか、「である体」の現在形・過去形のみを提示するだけにとどまっていた。文体を網羅的に扱うか、代表例の提示のみにとどめるか、日本語教科書の方針は大きく2つに分かれた。

【表1：名詞文】

	指導項目	日本語ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
名詞文	名詞+である	○	○	○	○	○	○	○	7
	名詞+だ	○	○	○	○	○	-	○	6
	名詞+であった	-	○	○	○	○	○	-	5
	名詞+ではない	-	○	○	○	○	-	-	4
	名詞+だった	-	○	○	○	○	-	-	4
	名詞+ではなかった	-	○	○	○	○	-	-	4

形容詞文の文末文体の取り扱いについても、名詞文と同様のことが言える。形容詞文の文末文体の種類は、形容動詞（な形容詞）・形容詞（い形容詞）の肯定形・否定形、現在形・過去形をあわせると10種類ある。日本語教育用教科書では、7冊中4冊は網羅的に文末の形式を提示していたが、残りの3冊は形容動詞の「だ体」「である体」の現在形のみを提示するか、形容動詞と形容動詞の現在形を提示するだけにとどまっていた。形容動詞の現在・肯定形である「形容動詞+である」は、7冊すべてで取り上げられていたのに対し、形容詞の現在・肯定形「形容詞+い」の形式がとりあげられているのは5冊と、形容動詞と形容詞の扱いの差が見られた。

【表2：形容詞文】

	指導項目	日本語ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
形容詞文	形容動詞+である	○	○	○	○	○	○	○	7
	形容動詞+だ	○	○	○	○	○	-	○	6
	形容詞+い	-	○	○	○	○	○	-	5
	形容動詞+ではない	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容動詞+であった	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容動詞+だった	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容動詞+ではなかった	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容詞+くない	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容詞+かった	-	○	○	○	○	-	-	4
	形容詞+くなかった	-	○	○	-	○	-	-	3

動詞文にも同様の傾向が見られる。動詞文の現在・肯定形は7冊の日本語教科書全てにおいて、また動詞文の現在・否定形は6冊で提示されていたが、動詞文の過去・肯定

形、動詞文の過去・否定形が提示されているのは4冊にとどまった。

【表3：動詞文】

	指導項目	日本語ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
動詞文	動詞+う	○	○	○	○	○	○	○	7
	動詞+わない	○	○	○	○	○	-	○	6
	動詞+た	-	○	○	○	○	-	-	4
	動詞+なかった	-	○	○	○	○	-	-	4

論文・レポートの文体は一般的に「だ体」「である体」と言われていても、名詞文・形容詞文・動詞文の文末形式の種類を合計すると20種類に及ぶ。さらに形容詞文には「よい(いい)／よくない」、動詞文には「ある／ない」といった例外もある。論文の文体をはじめ導入する中級段階では、「だ体」「である体」の説明だけでなく、品詞別の文末形式の違いについても正しい知識を導入する必要があるだろう。

日本語教科書の傾向をみると、典型的な「である体」の形式をもつ名詞文・形容詞文の現在・肯定形は7冊すべての教科書で扱われていたのに対し、「である」が付かない形容詞文の現在・肯定形が提示されているのは5冊に減っていた。また、名詞文・形容詞文・動詞文のいずれにおいても、現在形と比較して過去形、肯定形と比較して否定形の提示数が減る傾向がある。日本語学習者によく見られる文体の誤用に「この影響は大きいである。」「原因があったである。」のように、形容詞文や動詞文への「である」の過剰な一般化がある。これには学習者自身の注意の欠如もあるが、教科書の情報量・練習量不足の影響も考えられる。品詞別の特徴と共に、時制や肯定・否定の違いによる文末形式の差異についても、学習者の意識が及ぶように、教師は教材の情報量にも留意するべきであろう。

#### 4-2 接続表現

接続表現では、文頭に現れる接続表現と、文中の接続部に現れる接続表現に分けて集計したのちに、全体の傾向を考察する。

文頭に現れる接続表現の中で最も多くの教科書でとりあげられていたのが、逆接型の「しかし」と、順接型の「したがって」であった。取り上げられていた副詞の機能は、この逆接型・順接型が中心を占めていた。このほかには、補足型「なお・ただし」、「というのは・なぜなら」、転換型の「では」を取り上げているものが1冊ずつあった。

教科書全体の傾向としては、文頭の接続表現の指導項目は、逆接型・順接型にしぼられて導入されているといえる。この逆接型・順接型の展開構造は、話し言葉でも非常に多用される展開構造であるため、「でも」「だから」「だって」のような話し言葉を書き言葉に持ち込んでしまうことが少なくない。したがって、話し言葉から書き言葉へ意識を転換するため、この2つを中心に上げ、その他の接続詞は他の学習項目にまとめ

られていると考えられる。

【表4：接続表現(1)】

		指導項目	日本語ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
文頭の 接続表現	逆接	しかし	○	○	○	○	○	-	○	6
	逆接	だが	-	○	○	-	○	-	-	3
	逆接	であるが	-	-	-	-	○	-	-	1
	順接	したがって	-	-	○	○	○	○	○	5
	順接	ゆえに・それゆえ	-	○	-	○	-	○	○	4
	順接	そのため・このため	-	○	○	○	-	-	○	4
	順接	そこで	-	-	-	-	-	-	○	1
	補足	なお・ただし	-	-	-	-	-	○	-	1
	補足	というのは・なぜなら	-	-	○	-	-	-	-	1
	転換	では	-	-	-	-	-	-	○	1

次に、文中の接続部の表現について分析する。文中の接続表現としては、「動詞＋連用中止法（肯定形）」が日本語教科書7冊中6冊に提示されており、論文・レポートの表現として高い位置づけにあることがわかった。次いで、「動詞＋連用中止法（否定形）」が5冊、「形容詞＋連用中止形（肯定形）」が4冊と続いた。「形容詞＋連用中止形（否定形）」、「形容動詞＋連用中止形（肯定形）」、「形容動詞＋連用中止形（否定形）」が提示されていたのはそれぞれ1冊のみであった。「名詞＋連用中止形」を扱った例は見られなかった。なお、連用中止形の提示が全くない教科書もあった（〈日本語ラ〉）。

連用中止形の形式は、動詞・形容詞・形容動詞・名詞のそれぞれに肯定形・否定形の形式があり、全てを網羅すると8種類の表現形式があるが、多く取り上げられているのはそのうち3種類と取り扱いに偏りがみられた。文末文体の場合は、「である体」の「である」という形式が明確に現れる名詞・形容動詞の提示例が多かったのに対し、文中の接続部では連用中止形「であり」の例が少ないのは対照的な結果であった。「形容詞＋連用中止形（否定形）」の取り扱いが少ないことも含め、日本語教科書としては表現のバランスがとれていないように思われる。文体の統一は文末形式だけでなく、文中の接続の形式も整って最終的に成立するものである。書き言葉を本格的に学びはじめる中級レベルの教科書では特に、表現形式の配置のバランスは重要ではないかと思われる。

文中の接続表現として提示されていた接続助詞には、「が」「ば・と」「ため」「ので」の4種類見られたが、その中で最も多くの教科書が取り上げていたのが「が」であり、5冊の日本語教科書が取り上げていた。次いで、「ば・と」が3冊、「ため」「ので」を取り上げていたのはそれぞれ1冊ずつであった。話し言葉では、「が」に対して「けど」「けれど」、 「ば・と」に対して「たら」、 「ため」「ので」に対しては「から」が多用される傾向がある。日本語教科書では、話し言葉から書き言葉へ切り替える表現として、これらの接続助詞が提示されていると考えられる。「ば・と」「ため」「ので」は初級半ば以降に導入される接続助詞で、普通体から接続するよう導入されることが多いが、

「が」は初級前半から導入される接続助詞であるため、日本語学習者にとっては「です・ます体」から接続させることに慣れている表現形式である。そのため、多くの教科書が意識的に提示し、書き言葉としての定着を図っているものと思われる。

【表5：接続表現(2)】

		指導項目	日本語 ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
文中の 接続表現	接続助詞	が	○	-	-	○	○	○	○	5
	接続助詞	ば・と	○	-	-	○	-	-	○	3
	接続助詞	ので	-	-	-	○	-	-	-	1
	接続助詞	ため	-	-	○	-	-	-	-	1
	連用中止法	動詞+連用中止法 (V)	-	○	○	○	○	○	○	6
	連用中止法	否定+連用中止法 (～ず(に))	-	○	○	○	○	-	○	5
	連用中止法	形容詞+連用中止法	-	○	-	○	○	○	-	4
	連用中止法	動詞+連用中止法 (Vており)	-	-	○	○	-	-	○	3
	連用中止法	動詞+連用中止法・否定 (Vておらず)	-	-	-	-	-	-	○	1
	連用中止法	形容詞+連用中止法・ 否定(～くなく)	-	-	○	-	-	-	-	1
	連用中止法	形容動詞・連用中止法 (～であり)	-	-	○	-	-	-	-	1
	連用中止法	形容動詞・連用中止法・ 否定(～ではなく)	-	-	○	-	-	-	-	1

### 4-3 副詞

今回調査した中で、もっとも提示数が多かったのが副詞であった。機能別にみると、程度の副詞が最も多く、次いで様態の副詞、陳述の副詞という順になった。

程度の副詞の中では、「たいへん・非常に」が7冊、「多くの・数多くの」「少し・若干・わずか」が6冊、「さらに」が5冊、「約・ほぼ・およそ」「あまり」が4冊の日本語教科書にそれぞれ提示されており、数量の表現を中心に、日本語教科書では指導項目の共通性の高いことがわかる。

様態・陳述の副詞は、程度の副詞に比べ教科書による差が見られた。「やはり」「次第に・徐々に」「様々(な)」は4冊、「きちんと」は2冊、その他の副詞は各日本語教科書に1冊ずつ提示されるのにとどまっていた。「きちんと」は〈日本語ラ〉〈小論文への12〉では書き言葉として提示されていたが、〈理工系作文〉では話し言葉として提示されており、教科書による分類の違いも見られた。

副詞は話し言葉的なものから書き言葉的なものまで、非常に語彙数が多く、日本語学習者にとっては学習の負担が大きいものである。語彙数は多い上に、そのどれが話し言葉・書き言葉なのか、学習者が一般的に使っている辞書にはその記述がないため、学生が確認できる方法がないのも、学習が困難な点である。使用頻度の高いものを教科書で確実に覚えることに加え、膨大な量の語彙を継続的に学習していける方法を考える必要



がある。

【表6：副詞】

	指導項目	日本語ラ	作文編	小論文への12	理工系作文	論理的な文章	ワークブック	論文作成編	小計
副詞	程度 たいへん・非常に	○	○	○	○	○	○	○	7
	程度 少し・若干・わずか	○	-	○	○	○	○	○	6
	程度 多くの・数多くの・多数の	○	○	○	○	○	○	-	6
	程度 さらに	○	○	○	○	-	-	○	5
	程度 約・ほぼ・およそ	○	-	○	○	-	-	○	4
	程度 あまり	-	-	○	○	○	○	-	4
	程度 多少	-	-	-	-	○	○	-	2
	程度 多く・数多く	-	-	-	-	○	○	-	2
	程度 まったく	-	○	○	-	-	-	-	2
	程度 もっとも	-	-	-	○	-	-	○	2
	様態 やはり	○	-	○	-	-	○	-	3
	様態 次第に・徐々に	○	○	-	○	-	-	○	4
	様態 さまざま(な)	○	○	○	○	-	-	-	4
	様態 きちんと(正しく・ 整然と・十分に・ しっかり)	○	-	○	-	-	-	-	2
	様態 正確に・規則通りに	-	-	-	○	-	-	-	1
	様態 いまだに	-	-	-	-	-	-	○	1
	様態 すでに	-	-	○	-	-	-	-	1
	様態 ようやく	-	-	○	-	-	-	-	1
	様態 明確に	-	-	-	○	-	-	-	1
	様態 ちょうど	-	-	○	-	-	-	-	1
陳述 おそらく	-	-	-	-	-	-	○	-	1

#### 4-4 縮約形

文末モダリティ・アスペクト表現、助動詞、助詞には、話し言葉の形式として、音の脱落や融合の結果、本来の形式より簡略な音形で実現された「縮約形」を持つものがある。論文・レポートの教科書では、縮約形がまとめられ、それに対する書き言葉の形式を学習する項目としているものがある。今回は、文末に現れる縮約形を対象に、その指導項目となっている表現を調べた。

最も提示数が多かったのが、縮約形「じゃない」(書き言葉「ではない」)で6冊と最も多く提示されていた。続いて、縮約形「んです」「んだ」(書き言葉「のである」「のだ」)、縮約形「てる」(書き言葉「ている」)で、それぞれ5冊の日本語教科書で提示されていた。

縮約形の扱いは、日本語教育の様々な問題と関連がある。1つは初級文型との関係である。話し言葉が重視される初級では、縮約形「じゃない」「んだ」は共に初級文法の前半で導入されることが多い。したがって、学習者にとっては「ではない」「のだ」という書き言葉の形式よりも縮約形のほうが慣れている。そのため、話し言葉から書き言葉への転換をはかるため、多くの教科書で提示されていると考えられる。これに対し、

縮約形「てる」「ちゃった」「なきゃならない」「なくちゃならない」は、同じく初級学習する表現であるが、それぞれの書き言葉「ている」「てしまう」「なければならない」「なくてはならない」のほうが先に導入される。初級の教科書の中で縮約形が扱われることは少なく、むしろ中級以降に自然な会話を学習する中で縮約形が後から出てくることが多い。そのため、縮約形「じゃない」「んだ」に比べて、優先度が低くなる傾向があるといえる。

助川（2005：18）でも指摘されているように、縮約形は、特に中・上級学習者にとって聴解力の向上や会話の流暢さには欠かせない表現であるが、フォーマルな場面や書き言葉で用いるとスタイルが低くなってしまふという問題が生じる。初級文型との関連、また音声教育との関連にも配慮しながら、書き言葉としての表現と使用場面が身に付くように指導していくことが必要であると思われる。

【表7；縮約形】

	縮約形	指導項目 書き言葉	日本語 ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	小計
縮約形	じゃない	ではない	-	○	○	○	○	○	○	6
	のである	んです	○	○	○	○	○	-	-	5
	てる	ている	-	-	○	○	○	○	○	5
	んだ	なのだ	○	○	○	-	○	-	-	4
	ちゃった	てしまった	-	○	-	○	○	○	-	4
	なくちゃならない	なくてはならない	○	-	-	-	○	○	-	3
	なきゃならない	なければならない・ なくてはならない	-	○	○	○	-	-	-	3
	とく	ておく	-	○	-	○	-	○	-	3
	といた	ておいた	-	-	○	-	○	○	-	3
	じゃないか	ではないか	○	-	-	-	○	-	-	2
	ちゃう	てしまう	-	-	-	-	-	○	-	1

## 5. まとめ

本稿では、論文・レポート教育用教科書における、文体に関わる「機能語」について分析を行った。その結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 文末文体は、現在・肯定形を中心に指導項目が構成されていた。過去形、否定形の取り扱い、教科書によって差がみられた。
- 2) 文末文体を品詞別にみると、文末に典型的な「である」の形式をもつ名詞文・形容動詞文は取り扱われる機会が多いのに比べ、「である」の形式をもたない形容詞文が取り上げられる機会は少なく、品詞ごとによる取り扱いの差が見られた。
- 3) 文頭に現れる接続詞は、逆接型・順接型・補足型にしばられて導入されていた。文中の接続表現で最も多く取り上げられていたのは連用中止法による接続表現であった。接続助詞を用いた表現では、逆接の「が」が最も多かった。副詞は、程

度の副詞の取り扱いが最も多く、続いて様態の副詞、陳述の副詞となり、機能別に取り扱いの差が見られた。

- 4) 縮約形では、縮約形「じゃない」(書き言葉「ではない」)、縮約形「んです」「んだ」(書き言葉「のである」「のだ」) など、初級前半で導入される縮約形に対する書き言葉の表現が中心に指導項目となっていた。
- 5) 今回調査をした7種類の日本語教科書の論文・レポートの文体の指導項目は、全体的に、
  - ・現在・肯定形を中心に、である体の典型的な形式の提示すること
  - ・話し言葉で多用される語彙・文構造を重点的にとりあげ、それに対する書き言葉の表現を定着させること
  - ・です・ます体中心の初級文型で学習した話し言葉を、である体中心の書き言葉へ転換すること
 を目的に、作成されていた。
- 6) 教科書を比較すると、文体に関する指導項目は、最大で51項目から最小で22項目まで、提示される項目に幅が見られた。22～28項目の典型的な表現に絞っている教科書と、40項目以上に渡り幅広い表現を取り上げている教科書の2つのタイプに大別することができる。

【表8：教科書別指導項目数】

教科書	日本語ラ	作文編	小論文 への12	理工系 作文	論理的 な文章	ワーク ブック	論文作 成編	平均
指導項目数	22	40	51	47	42	26	28	36.6

紙幅の限られた教科書においては、である体の典型的な表現を重点に指導を行うというのは妥当な考え方である。ただ、教科書で学べるのは、論文・レポートに必要な表現のごく一部にすぎず、また学習した表現の練習する問題も限られている。残された膨大な表現を、いつ、どのような形で指導していくべきか、検討していく必要があるであろう。

また今回調査した日本語学習者用の教材には、その指導項目の構成に初級導入文型の影響や話し言葉の指導と関連する点が見られた。中級前半では初級の話し言葉の文体から書き言葉の文体を身につけるために、体系的な項目の学習が必要であろうし、上級以上では基本的な文体の表現から、専門分野別の文体特徴の指導へ発展させる必要がある。調査を通じて習得の段階に応じた問題点を明らかにし、指導項目を再び見直すことも必要であろう。

今回の調査から、論文・レポートの文体の指導項目は、教科書によって差があることが明らかになった。教科書で「文体」の項目を学んだとしても、教科書ごとに学習内容の内容が異なることから、身に付く内容は異なってくる。学習者に不足しているもの、

今後必要となってくるものを見極め、学習者の能力や目的に応じて、適切な教材を選択することが重要になってくると思われる。

## 6. 今後の課題

今回は、論文・レポートの一部の機能語の調査であったが、論文・レポートの文体を支える表現は機能語から各分野の専門用語まで幅広く、膨大にある。この中で、教科書の中で取り上げることができるのは、ごく一部に限られる。当該の授業だけでなく、それ以降も引き続いていく論文・レポート作成については、結果的に学習者の自律的な学習に委ねることになる。そこで、教科書やそれを用いた授業で求められることは、限定された情報で、学習者が効率よく「論文・レポートのイメージ」を獲得し、それを学習者自身の手で発展できるような道筋をつけていくことであると思われる。因ほか(2008:29)では、「研究成果を公表する論文の文章はどうあるべきかの知識の総体」を「論文構造スキーマ」と呼んでいる。学習者が効率よく「論文構造スキーマ」を獲得できるよう、今後とも能力別、目的別など様々な視点から教材とそれを用いた指導法の改善が必要であると思われる。

近年のアカデミック・ジャパニーズの研究では法学系論文<sup>5)</sup>、農学系・工学系論文<sup>6)</sup>、理工系の口頭発表<sup>7)</sup>などを対象に、各専門分野における語彙・文体・論理構造の研究が進められ、分野別の特徴が明らかにされつつある。村岡(2008)はこの次の段階として、このような分野別の表現をどのように指導していくのかという、教育実践の研究の必要性を指摘している。

今後の課題として改善に必要なことは、各専門分野で明らかになりつつある特徴を、学習者が「論文構造スキーマ」としてどのように習得しているのか、また習得上にどのような問題点があるのかなどを調査し、改善すべき点を教材に取り入れることである。また近年、留学生だけでなく、大学で学ぶ日本人学生もメールやブログの使用の影響で、話し言葉と書き言葉の文体差が曖昧になっており、論文・レポートの文体が身に付いていない者も多い。今回の調査では、日本語教育用の教材を対象としてとりあげ第二言語習得上の問題を中心に検討したが、さらに日本人大学生用の教科書や、日本人学習者も対象に調査の範囲を広げ、大学生活で求められるアカデミックスキルの基礎として、効率のよい論文・レポートの指導が行えるよう、今後も検討を重ねていきたい。

---

5) 木本(2006)

6) 村岡ほか(2005)

7) 仁科(2007)

## 【引用文献】

- 岡本輝彦・木川和子・辻本澄子・西尾節子・松井充子『初級語学留学生のための日本語Ⅰ・Ⅱ』  
(2002) 凡人社
- 川越菜穂子(1991)「日本語の話しことばと書きことば」『日本語学』Vol.10 No.5
- 木本和志(2006)「法学系論文の序論に見られる文章構造の分析—民法, 商法, 知的財産権法系論文を対象に一」『専門日本語教育』第8号 pp.19-26
- 小宮千鶴子(2005)「文体」『新版日本語教育事典』大修館書店 p.358
- 坂野 永理・大野 裕・坂根 庸子・品川 恭子(1999)『初級にほんご げんき1・2』ジャパンタイムズ
- 助川泰彦(2005)「縮約形」『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.17-18
- スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』
- 因京子・村岡貴子・仁科喜久子・米田由喜代(2008)「日本語テキスト分析タスクの論文構造スキーマ形成誘導効果」『専門日本語教育研究』第10号 pp.29-34
- 寺村英夫ほか編(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 仁科喜久子(1997)「日本語教育における専門用語の扱い」『日本語学』Vol.16 No.2 pp.60-69
- 仁科浩美(2007)「理工系修士論文発表会における質疑の視点と表現方法—化学系関連分野の分析から—」『専門日本語教育』第9号 pp.23-30
- 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 長谷川ユリ(1992)「話しことばと書きことばの指導—アメリカ人学習者を対象として—」『講座日本語教育』第27分冊 早稲田大学日本語研究教育センター pp.137-147
- 村岡貴子(1996)「文体の指導」『日本語学』Vol.15 No.8 pp.263-267
- 村岡貴子(2005)「報告の文体」『新版日本語教育事典』大修館書店 p.360
- 村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也(2005)「農学・工学系日本語論文の「緒言」の論理展開分析—形式段落と構成要素の観点から—」『専門日本語教育』第7号 pp.21-28
- 村岡貴子(2008)「専門日本語教育における語彙指導の課題—アカデミック・ライティングの例を中心に—」『日本語学』Vol.27 No.10 pp.60-69